

# 追悼大林太良氏

——錢塘江觀潮の頃——

野 村 純 一

学院大学たまプラーザキャンパスでの公開講演会「人類文化史における口承文芸」が、公には最後の機会になった。その折りの講演内容は機関誌「口承文藝研究」第二十号（学会創立二十周年記念号）に掲載されている。

大林太良氏は、平成十三年四月十二日逝去された。七十一才でいらした。葬儀告別式は、四月十六日、中野の宝仙寺で行われた。そのことに関するは、氏の「年譜」とともども、国立民族学博物館『民博通信 93』（平成十三年七月二十三日）に掲載されている。ここでは、右所収記事との重複を避けたい。

日本口承文藝学会、第二十三回大会は平成十一年六月五日（土）、六日（日）の両日、沖縄国際大学を会場に開催された。大会一日目のシンポジウムは「羽衣説話の國際比較」であった。コメンテーターの一人として大林太良氏の出席が予定され、ボスターその他の案内にも予告がなされた。しかし直前になつて、体調不良のため出席不能との申し入れがあつた。今までに例のないことであつた。理由は発熱が続き、長旅には耐えられないというお話をあつた。これがために日本口承文藝学会に限つてすれば、第二十回大会、すなわち平成八年六月一日（土）、國

# 人類文化史と日本口承文藝学会

大林太良



だし、現今の情勢からみれば、実は一方に発達した文字社会にこそ口承の文芸は一層繁栄を促されているという事態がある。実際にまた大局的に見ても、早くから文字の使用を促進してきた、いわば文字大国にこそ、併せて口承文芸の発達があつたという現実にも直面する。したがつて、その際に提出された氏の発言に向けては、本人のお望み通り「反対の意見」があれば、今後も間断なく議論して行くのがこの学会に課せられた責務であろうし、それはまた大林氏への、この上ない供養になるかと思われる。

大林太良氏を偲んで、ここまで書いたところで、青土社から『私の一宮巡詣記』（平成十三年九月十日）が届いた。巻末に「連載開始前の構想覚書」が収められている。これによれば、全体の三分の二に達した処で、そこでの意図は挫折した結果になる。それについても何故『一宮巡詣記』であったのか。未完に終つたこの一冊に、氏はいつたい如何なる思いを託されていたのか、それについて少々記してみたい。

遡つていえば、もう十五、六年も経つたのだろうか。昭和五十九年九月一日から十四日までの二週間、大林太良、荒木博之、野村の三人は、中国民間文芸研究会からの招聘にもとづいて、訪中の旅を試みた。このときは、北京、南京、揚州、蘇州、杭州、寧波、上海を巡り、学術交流ということもあつて、行くさきさきで講演、研究発表、シンポジウムが組まれていた。同行は王汝蘭女史であった。暑熱と過酷な行程に悩まされつつ、そ

れでも、中国神話にかかるテーマは大方大林、美國（アメリカ）をはじめ英語圏との比較研究の面は荒木、民間故事に関する面では野村という具合に、それぞれが分担して対応するようにした。表向きはともかくも、これによって、日々を凌いで予定を消化して行つた。大要、その日暮らしの旅になつた。

疲れが重なつてくれば、お互ひ、思わぬ愚痴や感懐を漏らす

場面が生じる。その際、大林氏からは忘れられない一言が発せられた。主旨はこうである。ひととそれぞれ、学問の方法に疑義が挟まれ、また伴うのは当然だ。いまの私にとつて最大の課題は「大林は何処に行つても、結局は行くさきざき、図書館での文献渉獵、いわば文献操作に始終していて、フィールドとは無縁の論文を書く。要は書斎派だ」といった批判がある。これをどう克服するか、それが問題だといった発言であった。多くの卓越した業績を残している人からの言葉に、私は一瞬たじろぐ思いがすると共に、深い感慨にとらわれた記憶がある。

このあと、錢塘江に赴いて私共は念願の觀潮に立ち会う機会を得た。そこでの大林氏の昂ぶり方とはしゃぎようは、これまた忘れられない。午後一時、ほぼ予告の刻限になつて、海上遙かに不気味な轟きが生じると間もなく、河口の方から丈余の波が幾重にも逆上して来、そのまま上流からの錢塘の流れと急激にぶつかり合う。そこに巨大な渦巻きが生じた。防潮堤に集まつた大観衆から拍手とどよめきが起り、ついで更に大きな波が下流から押し寄せ、押し寄せ、最早とどまるところを知らな

い。波は急噴して狂奔し、眼前に水が盛り上つて川は膨張する。この世のものとは思えぬ景観にひとびとは歎声と悲鳴を上げて逃げ惑つた。私共三人も足元に迫る水の中をひた走りに走つた。その中で、神話学者大林太良氏は、大声で叫んでいた。「見たよ、見たよ。立ち会つた。これで書ける。これが“洪水神話”的原型だ！」

大林氏の説明は、こうである。人類が所有する洪水説話は、創世神話、もしくは創生説話として不可欠の位置を占める。しかし、たつた一度の大洪水がいつまでもひとびとの記憶に留められるのは、なかなか難しい。これには必ずや繰り返しての経験、重ねての体験がなければならない。四年に一度のナイルの氾濫でもよし、溢水でもよい。その意味で現実最も説得力のある材料は、毎年定期的に惹起する洪水ではなかろうか。それからすれば、中国神話を理解し、そこにアプローチするために、錢塘江の高潮は一度は立ち会つておくべき現象だというわけである。それでなくとも、中国では觀潮こそは不老長寿への予祝条件であつたのである。しかもこのとき、遡上する潮と共に運ばれてきた海の魚は、内陸部に居住する水田耕作民にとつては、いかにも文化人類学者らしい説を披露して下さつた。

大林太良氏の学問は、この辺りから徐々に変化はじめたのではないかとも知れない。しかし、おそらくはそうなのである。実

地に赴いて事物や現象をたしかめ、検証した上で次に古文献と照合する。そうした作業の繰り返しになつた。その後の著述『東と西・海と山——日本の文化領域』『神話の系譜』——日本神話の源流をさぐる』『正月の来た道——日本と中国の新春行事』『海の神話』『北の人 文化と宗教』『仮面と神話』、そして『山の民 水辺の神々——六朝小説にもとづく民族誌』に至つては、ますますその色彩は濃い。これからすれば未完『私の一宮巡詣記』はいずれ、大林太良による日本の「神々の民族誌」になる筈であつたのではなかろうか。

そのお人柄と学問を偲べば、学会としていまはただ残念の一言に尽きる。

(のむら・じゅんいち／國學院大学)